進学通信
ステップゼミナールだより
ホップ・ステップ
May
第127号
2017年5月1日発行

4/2､3 第１回の道コン

道コンの見直しと採点チェック

成績表をもとに個別に面談、目標と取組み方を確認

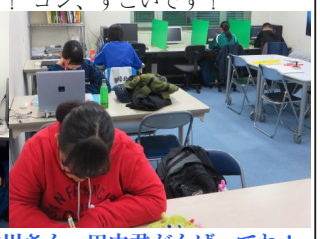
２９年度がスタート　各学年とも１学期（前期）の内容はとても大事です。特に中１、高１の人は学習のリズムをしっかり！

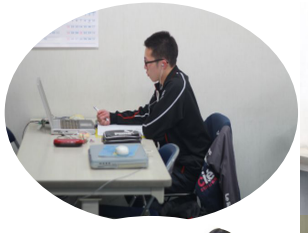
田村さんのおじいちゃん、おばちゃんからの差し入れ

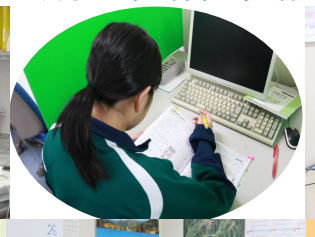
今月も放射線技師の住川さんがお菓子をどっさり差し入れ

小６の田中杏奈さんの折り紙で作ったえび。じょうずです！

中２波多野君の作ったドラゴン、すごいです！


今年度は新高１が５人、高２が４人、高３が３人で高校生が１２人もいます。高専１年の古川さん、田中君がんばってね！





高３になった教員、看護師志望の佐藤さんと富岡さん。

高専５年の斗内君は愛知の豊橋技術科学大学へ進むことに。

今年、妹（左）が市立病院の看護師になった住川姉妹。

作業療法士会釧根支部の支部長になる８期生の佐々木君。

★高等専門学校　地味にスゴイ！
高専から難関大、人気企業へ！
編入先は、東大、東工大、東北大…就職先は三菱重工、日立製作所、ＮＨＫ…

本誌は今週号で全国３４３６高校の大学合格実績を掲載しているが、５年制の高等専門学校から大学へ編入することも可能だ。調べてみると、その編入先は難関大や有名大が多い。高専生は就職先も人気企業や有名企業が目白押し。高専の実態を探ってみた。

約４カ月前の昨年12月10日、スウェーデンのストックホルムで行われたノーベル賞授賞式の会場に春日貴章さん（当時23）の姿があった。招待を受けたのだ。受賞者たちとの交流の場にも参加した。

同賞授賞式には毎年、卓越した研究成果を上げた学生たちが世界中から招かれるが、その数は僅か約25人。春日さんは〝飛びきり優秀な学生〟と認定されたのである。

ただし、春日さんは東京大をはじめとする難関大の学生とは違った。それどころか、大学院生、大学生ですらなかった。国立香川高等専門学校の専攻科２年生で、放射線やその防護について研究していた。

高専生がノーベル賞授賞式に招かれたのは初の快挙だったので、春日さんが脚光を浴びると同時に高専の存在も一躍クローズアップされた。が、そもそも企業側の高専生たちへの評価は一貫して高い。就職率は今も昔もほぼ１００％。しかも就職先には有名企業がズラリと並ぶ。

それだけではない。実は高専から難関大への編入者や、専攻科を終えてから大学院への進学者も数多く、その実績は進学校も顔負けと言っても過言ではない。

「高専生は卒業後に就職する」との先入観や固定概念を抱いている人も少なくないようだが、実際には卒業生の概(おおむ)ね半数以上が大学に編入学するか、専攻科に進む。その編入先や専攻科修了後の進学先は有名大学や大学院ばかりなのである。

高専は就職にも進学にも強い魅力的な教育機関と言えよう。しかし、高校や大学と比べると数が少ないため、内実はあまり知られていない。一体、どんな学校なのだろう。

「大学の学部卒程度の教育を（中学卒業後の）５年間で行おうという狙いで設置された高等教育機関です。１年生から専門教育を行います」（国立沼津高専の藤本晶校長）

大阪府立大高専のホームページにも「５年間で大学の工学部とほぼ同程度の専門知識や技術を身につけることができる」とある。国立茨城高専もＨＰで「就職先の企業からは、毎年その実力が認められ、大学卒と同様の扱いを受けています」と謳っている。

高校と大学を卒業するには７年間かかるが、５年間でそれと同等の教育をしようというのが高専なのだ。大学受験のために高校で学んだことを、大学入学後の一般教養課程でもう一度やるような時間のムダがないのが強みらしい。

高専が誕生したのは、日本が高度成長に沸いていた１９６２年だった。高水準の教育を受けた技術者の育成を産業界が望んだため、まず全国に国立の12校が設置された。函館や群馬、沼津、宇部、佐世保などの高専で、「国立高専１期校」と呼ばれている。

＜裏面へ＞

日本の高校生、目立つ「受け身」姿勢　米中韓と比べ

日本の高校生は米中韓と比べて勉強の姿勢が受け身的であることが、国立青少年教育振興機構の調査でわかった。「勉強したものを実際に応用してみる」と答えた日本の生徒の割合は10.2%で４カ国の中で最も低い。同機構は「板書をノートに書き写すなど、現在の学校の授業スタイルが反映されている」と分析する。

最大の原因は、「過保護」、「過干渉」。家庭や社会が子供たちや若者に甘すぎるからで、現状に満足し責任感がなく、危機感に欠ける子供たちが多いと感じます。高専の学生と公立高校の生徒との差はそこにあります。

■５月の予定■

1	月	■平常授業	
2	火	〃	
3	水	★ＧＷ休み	
4	木	〃	
5	金	〃	
6	土	〃	
7	日	〃	
8	月		
9	火		
10	水		
11	木		
12	金		
13	土		
14	日	●休塾	
15	月		
16	火	富原修学旅行	附属中1年宿泊研修（～19）
17	水		
18	木		
19	金		
20	土		
21	日	●休塾	
22	月	阿寒中修学旅行	
23	火		
24	水		
25	木		
26	金		
27	土		
28	日	●休塾	
29	月	北中修学旅行	北陽定期テスト（～31）
30	火	景中修学旅行	
31	水		

携帯電話の教室持込禁止
携帯電話の持込は禁止。連絡は塾の電話を使用して下さい。

在籍する生徒の所属校
小学校　愛国・鳥取西・朝陽・附属
中学校　美原・共栄・景雲・鳥取・鳥取西・阿寒・附属・北・富原・遠矢
高　校　湖陵・江南・北陽・高専・武修館

発行：ステップゼミナール　088-0617　釧路町北都２－２－１　（TEL）0154-36-4170　HP：http://www.stepsemi.com　Mail：spirits@stepsemi.com

高専誕生の背景には戦後の学制改革もある。戦前まで存在した３年制の高等教育機関、旧制高等工業学校が姿を消してしまったため、それに代わる学校が求められていたのだ。工業国の日本には高専が不可欠だったとも言える。

その後、卒業生の評判の良さや各地の誘致熱もあって、高専は次々と新設された。旧制高等工業学校の流れも汲むこともあり、学科の大半は理系だった。

「現在、全国に高専は国立が51校あり、公立と私立が各３校。高専がないのは５県だけです」（前出・藤本校長）

文部科学省の２０１６年のデータによると、高専の学生数は全国で約５万７６００人。毎年約１万人が卒業する。ただし、大学は毎年55万人以上が卒業するので、圧倒的に少数派である。

その授業は、1年次から実験や実習をかなり重視するのが特徴であり、高校とは随分と違う。これも大学受験対策が不要だからできることなのだろう。

「高専生は大企業に入りやすい」

授業以外の学校生活も高校とは随分と異なる。まず、15歳の新入生であろうが、立場も呼称も「生徒」ではなく「学生」。その名にふさわしく、校則も高校と比べると緩やかで、国立沼津高専や国立茨城高専、国立岐阜高専など私服通学を認めているところが多い。高校では滅多(めった)に認められていないバイク通学を許可している高専も珍しくない。学生の自主性が重んじられているのだ。

教員側も「先生」とは呼ばれず、「教授」や「准教授」。こちらも名ばかりではなく、ほとんどの教員が博士号や修士号を持ち、学会にも所属し、論文の発表を続けている。高専の教員は教育者であると同時に研究者なのである。

次は受験生や親にとって重大な関心事であろう就職先を見てみよう。**卒業生の6割が進学し、残り4割が就職するという国立沼津高専の15年度卒業生の場合、就職先は旭化成や東京ガス、小野薬品工業、中部電力、セイコーエプソン、ＪＲ東日本――と、大学の就活生に人気の企業や有名企業が目白押しだ。**

同じ年の国立茨城高専の卒業生の就職先は日立製作所やＮＨＫ、日本たばこ、本田技研などで、やはり就職に強いのである。

３０００人以上が登録しているＳＮＳ「高専ネットワーク」を主宰する国立沼津高専ＯＢ（卒業後は筑波大に編入学）の宮田昌輝さん(25)によると、「高専生は大企業に入りやすい」という。

「私の卒業した当時も大手電機メーカーやＪＲ、電力会社にクラスから毎年１人以上は就職できていました」（宮田さん）

国立沼津高専や国立茨城高専ばかりではない。全国の高専生で作る情報誌「ＫＯＳＥＮナビ」には卒業生たちの就職先が紹介されているが、そこにも三菱重工や塩野義製薬、トヨタ自動車、京セラ等の人気企業や有力企業が並ぶ。

「高専生の就職率が抜群にいいのは、企業にとってそれだけ価値のある人材だからですよ。弱冠20歳にして即戦力の技術者として使えるのは高専生だけ。５年間の教育で、専門分野のかなり上のレベルに達しますから」（前出・藤本校長）

大卒者並みの実力がありながら若いというのは、企業側にとって魅力に違いない。のびしろの大きさが期待できて、企業内でさらなる教育を施しやすいのだから。

「就職できないということはまずありません。大抵は希望のところに就職できます」（同）

その上、高専生の就職活動は、大学卒業予定者のようにエントリーシートを数十社分以上書いたり、次々と面接を受けたりするような苦労がない。大抵は学校側による推薦で一発合格する。学生個人が一般試験を受ける場合も３社程度の受験で就職先が決まるという。

高専ＯＢは企業に入ってから成功する人も少なくない。たとえば、日立製作所の東原敏昭社長は14年の就任時、「歴代社長の大半が東大卒の日立で、新社長は徳島大卒」と話題になったが、もとは国立阿南高専生。３年次修了後、徳島大へ進学した。高専では高卒資格を得た時点で大学受験に挑むことも可能だ。

東大への編入も夢ではない

リコーで生え抜き女性としては初めて役員になった吾妻まり子さん（ＣＳＲ室長）は国立沼津高専卒。ヤフージャパンの執行役員ＣＴＯ（最高技術責任者）の藤門千明さんも同高専ＯＢで、卒業後に筑波大に編入した。

起業する人もまた多い。

「秀丸エディタで知られる『サイトー企画』の斉藤秀夫さんも高専卒（国立福井高専）です。ほかにも高専ＯＢが作ったＩＴベンチャーはたくさんあります」（藤本校長）。ゲーム「ポケットモンスター」を生んだゲームフリーク社の田尻智社長も国立東京高専出身である。

ヤフージャパンの藤門さんのように学問をより深めようと大学に編入する人も多く、**国立茨城高専の15年度卒業生１９４人の場合、就職者は76人で大学への編入者はそれより多い82人だった。**

その編入先はというと、東京大、東京工業大、北海道大、大阪大に１人ずつ。ほかに東北大が２人、筑波大が５人、千葉大が５人。

さらに、東京農工大には８人も編入し、ほかの国立大に50人以上が入った。卒業生が２００人以下ということを考えると、相当な進学実績と言えるだろう。

「国立大学にはセンター試験を受けずに編入できます。編入試験が必要な大学もありますが、推薦を得るだけで編入できるところもあります」（同）

高専生に向けた編入の門戸は広く、工業系学部のある国立大はすべて高専からの編入を受け入れている。その中にはもちろん東大も含まれる。その上、編入試験は入試と違い、大学によって試験日が異なるから、複数の大学の受験が可能。チャンスが多い。

前出・国立岐阜高専のＨＰには「高専から大学への編入学試験は高校からの大学受験に比べて、たいへん有利」と書いてあるが、それは決してオーバーではないのだ。

また、編入しなくても進学できる。１９９２年、高専卒業後の進路として２年間の専攻科が新たに設けられた。前出・春日さんも専攻科への進学組だ。

専攻科新設の背景には、社会全体の高学歴化がある。高専卒者の立場は「準学士」だが、専攻科を修了すると大卒者と同じ「学士」に。そこから、さらに別の大学院にも進める。

もちろん学校は進学や就職のためだけに存在するわけではない。前出・宮田さんに学生生活を振り返ってもらおう。

「高専生が面白いところの一つは、運動部や文化部に参加すると、高専の大会に加え、高校と大学の大会にも出場できたりするところです」

88年からは「アイデア対決・全国高等専門学校ロボットコンテスト（ロボコン）」も行われている。

ＮＨＫが放送する同コンテストは“高専生の甲子園”とも呼ばれており、これに参加したくて高専に入ったという学生も少なくない。

宮田さんの学生時代は寮生活だった。高専は数がそう多くないので、入学はしたいが自宅からの通学はできないという学生が大勢いる。そのために寮を設置している高専が多いのだ。

「一日数回の点呼があったり、消灯時間が決まっていたり、先輩の厳しい指導があったり。息苦しくもあったのですが、規則正しく、楽しい生活が送れました」（宮田さん）

旧制高等工業学校と同じく、学制改革で消滅した旧制高校の学生たちには、寮も人間教育の場だったとされるが、現代の高専にも似た側面があるようだ。

気になるのは入学試験の難易度だが、国公立の各高専の合格偏差値は概ね60台。ややばらつきがあるものの、その地域の２番手か３番手の進学校と同じ水準といったところ。“お得な学校”と言っていいだろう。

ただし、安易な気持ちで入学するのは禁物だ。「授業はハード」と、前出の藤本校長。５年間で大卒者と同じ知識と技術を持つ人材を育てようとするのだから当然だろう。

文科省のデータによると、高専の中退者は全体の３％弱で高校より随分と多い。同じく留年者も全体の４％弱だから、やはり高校よりかなり多い。

「高校生はほとんど留年しませんので、高専の方が留年する学生は多い。かといって退学には至らず、５年の課程を６年７年かけて卒業する学生が珍しくありません」（藤本校長）

文系学科も大学並みの授業内容

ある国立高専生はアルバイトに明け暮れた末に留年した。違う国立高専生はバンド活動に熱中し過ぎてやはり留年――。自主性が尊重され、自由度の高い学生生活を送れるが、学業を怠ると置いてけぼりを食う。ハードな授業を耐え抜いてこそ良い就職先や進学先が待っている。

「技術者の技術には実験など体で覚える部分があります。そうしたことは早くやらないと身につかない。テニスの錦織圭がそうであり、イチローもそうでしょう。やりたいことが決まってるのなら、高専に来ていただきたい」（藤本校長）

最後に、“高専通”を自負している人でも知らないことが多い文系学科の存在についても触れておこう。91年の学校教育法の改正で認められたもので、国立福島高専にはビジネスコミュニケーション学科、国立富山高専には国際ビジネス学科、国立宇部高専には経営情報学科がそれぞれ設置されている。

国立富山高専は国際ビジネス学科についてＨＰで「経営学、外国語と異文化理解、情報処理の知識、技能を総合的に習得し、地域社会と国際社会の両方を視野においてビジネス社会に貢献できる創造的なビジネスパーソンを育成します」と説明。まるで大学の国際ビジネス学科だ。５年で大卒者並みの人材を育成する方針は理系と変わりはないらしい。

４月になり、新中学３年生とその親たちは、志望校を本格的に考え始めるだろう。その視野の中に高専を入れておいて損はないはずだ。

ノンフィクション作家・西牟田靖　１９７０年、大阪府生まれ。著書に『僕の見た「大日本帝国」』、『ニッポンの国境』のほか、『本で床は抜けるのか』（本の雑誌社）など多数。

（サンデー毎日2017年4月23日号から）

全国にはおよそ高校は5,000校、大学が780校、短大が340校、専修学校が3,200校もあります。しかし高専はたった57校しかありません。その高専が北海道には4校あり、その１つが釧路高専です。

釧根地区では「遠い」とか、「5年は長い」とか、勉強が大変で「留年がある」とかの理由で敬遠される傾向があります。格差社会の中で楽な道を選ぶと自立は難しくなります。将来、技術系、工業系に進みたい人は、とにかく高専を選択肢に入れることです。（今は昔ほど勉強が大変ではありません！大学への進学にも有利）